

はしがき

『一目でわかる 中国経済地図』初版は2年前に出したが、「たいへん分かりやすい」と好評を博した。そこで今回データの大部分を更新するとともに、全国・各省・各市・各業種・各分野の第12次5カ年計画（2011～2015年）を涉猟し、第2版として「2015年までの展望」を編集した。いまや中国は5年後には、米国のGDPを追い抜くとIMFが予想しており、視野を先に広げないと展望が実態に追い越されるおそれさえある。中国経済はグローバリゼーションの一つの核心であり、世界経済の動向は直ちに中国に影響し、逆に中国経済の動きは、直ちに世界経済にインパクトを与えつつある。

新版から興味深いトピックを選んで解説してみたい。

第1は、「リンゴ」ブランドの話である。本書「工業力」に収めたMap 5-6-1～5-6-2（113～115ページ）を開いてほしい。昨年56歳で急死したスティーブ・ジョブズの生み出したタブレット型情報端末機iPadが東アジア世界の「どこで、どのような部品を、原価いくらで」調達し、それらを在中国の鴻海という台湾企業が製品として組立て、世界に向けて出荷しているかを一覽できよう。編者（矢吹）は8月8日に名入りのNew iPadをネットで注文した。翌9日中国から発送したというメールが届き、13日に東京の自宅に製品が届いた。注文から到着まで6日間だが、このスピードは、製造過程における部品の調達・組合せのスピードをも示唆している。集積回路を基軸とする軽量製品だから輸送はすべて航空貨物による。グローバル経済をものづくりから見ると、その一端がここに浮かび上がる。この鴻海に買ったたかかっているように見える斜陽シャープの運命が、個別事例にすぎないならば幸いだと思う。

第2に、これらのものづくり労働の担い手である「農民工」の姿を描いてみよう。Graph 1-6-1（34ページ）は、母体「農村人口」のなかに、16～20歳の「農民工」がどのように生まれるかを示した。これらの農民工がより高い賃金を求めて流出し、どこに吸収されるかをMap 1-5-1、Map 1-6-1（33、35ページ）などが示している。これらを描けたのは「農民工調査監視報告」というデータのおかげだ。「農民工」の呼称自体は、かねて中国経済を理解するキーワードの一つになっているが、その全体像をようやく確かな統計で把握できたことになる。

第3に、中国経済の成長率を日本のそれと比較してみたい。Chart 2-3-1（50～51ページ）で、日本の高度成長（1955～1970、16年間）と中国のそれ（1991～2011、21年間）を比べると、持続期間も年平均成長率も、中国のそれは日本よりも一回り大きい。これは国土規模や人口規模からして当然ともいえる。二つの経済は、現在世界2位と3位の経済として、密接な相互補完の関係にあり、その相互依存の構造はますます深まりつつあるが、日中国交正常化40年の今日、両者の政治関係は、いわば「40年来最悪」と化しつつある。8月15日という象徴的な日に、香港の活動家たち十数名が尖閣諸島への上陸を試み、日本側に逮捕された。尖閣諸島沖で中国漁船と日本の海上保安庁の監視艇が衝突して以来の日中トラブルは、対立を煽る両者のエスカレーションを経て、いまや経済交流の基礎をも危うくしている。

最後に、中国の政治は秋の共産党大会で新指導部が選出されようとしている。経済の見通しは短期的には、依然厳しいものがあるが、中国の世界の工場としての地位や高度成長の体質が失われたわけではない。目先の混乱に目を奪われることなく、中国経済を的確に展望して、日本の行方を考える素材としていただければ、編者にとって望外の喜びである。

2012年8月15日

編者 矢吹晋